

# 天使たちの課外活動8

ガーディ少年と暁の天使（下）

茅田砂胡

*Sunako Kayata*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

# 天使たちの課外活動 8

ガーデイ少年と暁の天使（下）

## 11

エリクソン夫妻と会食してからしばらく経った頃、パラデューの元にソフィアから連絡があった。

「実はあの……今日はお願ひがありまして……」

歯切れの悪い、困惑した口調だった。

「無理なお願ひであることは承知しておりますが、うちの孫娘に、ぜひとも義理の息子さんのお料理を食べさせてやりたいんですの」

「ほう？」

パラデューも察しのいい人間である。

この『お願ひ』が先日、自分たちをテオドルの店に招待してくれとジャンヌに頼んだものとは違う意味合いを持っていることを、ソフィアの口調から敏感に感じ取っていた。

「お孫さんには何か、普通には来店できない理由があるのですかな？」

「そうなんです。孫はまだ十歳なので……」

なるほどと思った。そんな子どもは正式なコース料理を提供する夜のレストランには入れない。

ソフィアは上流階級の女性だ。社交界の決まりを知らないはずはない。

だからこそ、『無理は承知のお願ひ』なのだろう。

こちらを氣遣う申し訳なさそうな口調ながらも、切羽詰まった様子で言ってきた。

「お昼も営業しているとはかり思っていたんです。ホテルのレストランは普通そうですから。ところが、ジャンヌに訊いたらお昼は営業していませんとかで、何とか、お昼にお願ひできませんでしょうか？」

「そう言われましても……困りましたな」

あの店に関しては、パラデューも管轄外だ。

自分の一存で返事はできないが、あの店には今は使っていない二階の個室がある。

可能性の一つとして言ってみた。

「夜の営業中に、特別にお孫さんを通すことなら、もしかしたらできるかもしれません」

「いいえ。それはいけません。おたくのお店は家族向けの飲食店とは違います。正式な晩餐ばんさんを提供する高級料理店に、十歳の子どもが入りするなんて、そんなご迷惑は掛けられませんわ」

熱心に言って、ソフィアは残念そうに洩もらした。

「本当は……娘の家まで来ていただいて、お料理をつくっていただくのが望ましいのですが」

「昼にですか？ それは難しいですな」

断言したパラデューだった。

「わたしは料理は専門外ですが、あれだけの料理を用意するためにテオは朝から厨房ちやうぼうに入っています。途中で抜けることなどできませんでしょう」

「もちろん。わかっております。ですから、何とかお昼にお店の営業をお願いできませんでしょうか」  
パラデューは失笑しかけて、飲み込んだ。

正式な晩餐を出す飲食店に子どもを行かせられないという自分の規則は破れないが、店側には臨時の昼営業という規則破りをしてくれと頼んでいる。

しかも、夫人本人は、至って常識的な頼みごとをしているつもりでいる。

上流階級の人々に顕著けんちやくな特徴とくちょうだった。特別扱いをされることにも、求めることにも抵抗がないのだ。軽く咳せき払いして、パラデューは言った。

「失礼ですが、お孫さんにはもう少し大きくなってもらうまで待つてもらってはどうですか？」

「いえ、それが……」

ソフィアは言いにくそうに口ごもった。

「……待てないんですの。そちらのお料理でしたら、孫もきつと食べてくれると思うんです」

「どういうことですか？」

「お恥はずかしい話ですが、孫は好き嫌いが激はげしくて、娘もほとほと困り果てております……」

「十歳のお子さんならば、多少の好き嫌いは致いたし方

ないことなのでは？」

「いえ、多少ではないんですの」

ソフィアの話によると、孫娘はもともと食の細かい子どもだったらしい。

らしい、という曖昧な表現なのは、父親も母親も娘の食事の様子を知らなかったからだ。

家には料理人がいて、家族の食事をつくっている。そして忙しい両親は滅多に子どもと一緒に食事は摂っていないかった。

これも上流階級では珍しくないことだが、端から『問題あり』と指摘されてしまったのでは話は別だ。

『学校から、孫が昼食を食べていないと指摘されて、初めて気がついたらしいんです』

「まったく食べないんですか？」

「いいえ。多少は食べているようです。学校からの連絡も『やや気になる』という程度の、いわば注意段階だったようですが、このまま放置しておいたら、次は『看過できない』という訓告の段階になります。

成長期なのに、そんなに少ししか食べないなんて、身体によくありません」

娘は普通の体格だったので、両親とも驚いた。慌てて家の料理人に確認して、初めて娘の小食と偏食を知ったそうだ。

「お嬢さまは何をお出ししても気に入らないものは手を付けてくださいません。グラタンやハンバーグ、シチューはお好きなようですが、それだつてほんの一口召しあがるだけで、後は残されます」

つまり野菜や魚料理には見向きもしない。

どうしてご飯を食べないのかと両親が尋ねると、『美味しくないから』だという。

ソフィアはほとほと困り果てた様子だった。

「……そんなはずはないんです。娘の家の料理人は一流ホテルの料理長を務めた人ですし、孫の学校のピュッフェも本職の料理人がつくっていますのに」

何とも贅沢な話である。

しかし、孫娘は美味しくないから食べないという。

「お医者さまに見せても、単なる偏食で、病気ではないのだから治療はできないと言われてしまって、娘もすっかり参っているのです。とにかく、まずは孫に食事が美味しいということを気づかせなくてはどうにもなりません」

夫人にしてみればテオドールの料理が最大にして最後の希望なのだろう。必死の様子で訴えてきた。

「そちらのお料理でしたら間違いはありませんもの。孫も必ず食べてくれるはずです。パラデューさん、ご無理を申しあげているのは重々承知しております。ですが、お願い致します。何とか、孫に食べさせてやってもらえないでしょうか」

パラデューは困ってしまった。

事情が事情だけに、無下にも断りにくい。

ひとまず夫人を待たせて、レストランに連絡した。こんな時もあの青年の存在が実にありがたかった。

「……というわけなんだが、どうしたものかな？」

「ちよっと待ってくださいね」

ルウはテオドールに何か相談していたようだが、やがて予想外のことを言ってきた。

「奥さまと直に話せますか？」

「わたしも参加していいかな？」

「もちろん。そのほうがありがたいです」

そんなわけでパラデューは自分の執務室の端末をホテルとエリクソン夫人、双方に繋いだ。

ルウが夫人に挨拶する。

「臨時支配人のルーファス・ラヴィーです。お話はパラデューさんから伺いました。お孫さんに昼食を食べさせる。それがあなたのご希望ですか？」

夫人は真摯な様子で頷いた。

「ええ、そうなんです。お願いできますか？」

「まかないでもいいですか？」

これは夫人には耳慣れない言葉だったらしい。

きよとんと問い返してきた。

「——何とおっしゃいました？」

「まかない飯です。ここで働いている料理人さんの

お昼ご飯です」

「まあ……」

「料理長は朝からずっと仕込みに掛かっているので、お孫さんのためにお昼に店を開くことはできません。ただ、ここで働く人たちのお昼ご飯を、お孫さんに分けてあげることならできます」

聞いていたパラデューは肝を潰した。

そんな無茶なと思わず言いかけたが、かろうじて飲み込んだ。

「明日は土曜ですから、ちようどいい。お孫さんも学校はお休みでしょう。いらっしやいますか？」

夫人は戸惑いながらも、前向きな様子だった。

「あの、お邪魔しても……よろしいんですの？」

「はい。ただし、明日のあなたがたは『お客さま』ではありません。そこは飲み込んでいてください。

正式な給仕はできませんし、普段着で結構ですよ。その代わり、お代はいただきます」

「いいえ、お支払いします。あの、ラヴィーさん」

夫人は急いで言ってきた。

「わたしと孫だけでなく、娘もよろしいかしら？」

「もちろん。十歳のお嬢さんでしょう。お母さんが一緒に来るのは当然です」

夫人はほっとしたように笑って、頷いた。

「では、明日のお昼に伺います」

「お待ちしています」

二人の会話が終わり、夫人との回線を切った後、パラデューが『明日は自分も行く』と宣言したのは当然すぎるくらい当然のことだった。

エリクソン夫妻には二人の息子と娘が一人いる。

娘のパトリシアは銀行家のロジャー・セラーズと結婚して、セラーズ夫人となっている。

パラデューは息子たちには会ったことはないが、セラーズ夫妻とは面識があった。

もつとも、パーティで二言三言、言葉を交わした程度に過ぎない。ロジャーは銀行経営者の息子で、



後継者でもあるので、パラデューが意識して記憶したのもロジャーのほうだった。

男ながら華やかな顔立ちで、なかなかの洒落者で、人当たりのいい人物だった。

その横にいたパトリシアは母親によく似た上品な印象の女性で、お似合いの美男美女だった。

二人とも名門に生まれ、夫婦仲も至極よさそうで、順風満帆の人生を送っていると思っていたのだが、家庭のことはわからないものだ。

翌日、パラデューは午前の予定を無理に調整して、いそいそとミシエルのホテルに赴いた。

しかし、今日の彼は客ではない。

支度ができるまで待っていてくれと言われたので、店には上がらず、ひとまずロビーで待機していると、昇降機の扉が開いて、ソフィアが現れた。

長椅子に座っていたパラデューを見ると、彼女は急いで歩み寄ってきて、笑顔で挨拶した。

「パラデューさん。本日は無理を聞いていただいて、

ありがとうございます」

「いやいや、お気になさらず」

如才なく答えたパラデューだった。

夜会服ではない彼女を見るのは初めてである。

パトリシアもだ。

昼間だからか、母娘ともに髪型も化粧も控えめにしているものの、着ているスーツは最高級の品だと一目でわかる。生まれ育ちの良さは隠しようもない。パトリシアも笑顔でパラデューに挨拶してきた。

「父も母も、こちらのお料理は本当に素晴らしいと絶賛しておりますの。よろしくお願い致します」

そしてロジャーも一緒だった。

彼が来ることは聞かされていなかったもので、正直、意外だったが、娘の食育に無関心とあっては（仮に今まで本当に無関心だったとしても）上流社会では父親失格と言われてしまうのだろう。

彼もパーティの時とは違って、ポケットチーフは無難な白、ネクタイも落ち着いた色合いのものだが、

ダブルのスーツはフルオーダーの一点ものだ。

いささか緊張の面持ちで深々と頭を下げてきた。

「ミスタ・パラデュー。お忙しいところ、まことに申し訳ありません。このたびは娘のことでお手数をかけします」

お嬢さま育ちの義母や妻とは違って、彼は多忙を極める投資家のパラデューに、こんな個人的な頼みごとを持ちかけることの是非を知っている。

同時に、パラデューが自分たちに立ち会うために、ここまで足を運んでくれたと思つたのだろう。

私的な時間をこんなことに使わせてしまつて申し訳ないと、心から思っている様子だった。

本当の目的は他にあるから気にしないでくれとは言えなかつたので、パラデューは曖昧に笑つた。

「一人増えることを上に知らせなくてはいけないな。

——そちらがお嬢さんかね？」

「はい。娘のフロレンスです。——ご挨拶は？」

大人たちの陰に隠れていた少女がおずおずと前に

出て、きちんと頭を下げた。

「初めまして。フロレンス・セラーズです」

フロレンスは両親にはあまり似ていなかった。すなわち祖母にも似ていない。

身体つきは細く、目鼻立ちも整っているのだが、表情に明るさがないのだ。

パステルカラーの服も白い靴も上品な可愛らしい意匠で、子供服には詳しくないパラデューの眼にも最高級のもののは見て取れる。長い髪も丁寧ていねいに梳くしられて飾りをつけている。

この年頃の女の子としては充分おしゃれなのに、どうにも冴さえない印象だった。

見知らぬ大人に対しても礼儀正れいぎしくはあるものの、視線は伏せがちで、話し言葉にも力がない。

小食で偏食の女の子——という情報からパラデューが推測した通りの少女だった。

両親も祖母も華やかな美男美女だけに、こうして並ぶと、この少女だけが異質に見える。

ホテルのスタッフが近づいてきて、パラデューに声をかけた。

「パラデューさま。上から内線です」

出てみると、あの青年の声が言ってきた。

「そろそろいいですよ。上がってきてください」

「すまない。一人増えたんだが、大丈夫かね？」

「ええ。お父さんでしょう。問題ありません」

パラデューはセラーズ一家とソフィアを案内して、最上階まで上がった。

テーブルクロスも掛かっていない、がらんとした店内を見て、セラーズ一家は戸惑った様子だった。

一方、ソフィアは前に来た時との変化に気づいて、不思議そうに言ってきた。

「あら？ 絵がありませんのね」

「ええ、掛け替え中ですね」

内心冷や汗を感じながらも、パラデューは努めて何気なく言葉を返したのである。

厨房のほうから話し声が聞こえ、料理服を着た人

たちがぞろぞろ出てきた。

明らかな部外者のセラーズ一家とエリクソン夫人、パラデューを見て、戸惑いながらも会釈してくる。

通常、彼らの食事は仲間内だけですませる。

だが、今日は既に部外者が紛れていた。

気づいたソフィアが驚きの声をあげる。

「まあ、シンクレア料理長、ラドフォード料理長も。

——今日はどうなさいましたの？」

チャールとズザックは笑顔で馴染み客に応えた。

「ご無沙汰しています。エリクソン夫人。セラーズ

ご夫妻も。——テオ先生がクラム赤牛の肩肉を叩き

始めたって、不肖の弟子が知らせてきたもんですからね」

「店は若い人たちに任せて、抜け出してきたのです。

これを食べ損なったら後悔してもしきれません」

二人とも実に嬉しそうな笑顔なので、ソフィアは逆に不思議そうな顔になった。両料理長にとって、

ここは『他の店』だ。料理人同士の交流、もしくは

視察で来ているはずなのに、純粹じゆんすいに食事を楽しみ  
にしているように見えるのが意外だったのだ。

ルウが出てきて、一家とパラデューに話しかけた。

「ようこそ、パラデューさん。エリクソン夫人」

「お言葉に甘あまえて参りました。お世話になります」

ソフィアが娘夫婦と孫を紹介する。

ルウもセラーズ夫妻に挨拶して、フロレンスに  
笑いかけた。

「こんにちは、フロレンス。ぼくはルウ」

男の人——だと思うのに、全然男の人に見えない  
相手にフロレンスはどぎまぎしながら頭を下げた。

「……こんにちは」

「朝ご飯は何を食べた？」

「……え？」

「どのくらいお腹空すいているのかなと思って。何時頃、  
どんなものを食べたのかな？」

フロレンスは黙もくってうつむいてしまったので、  
ルウはパトリシアに視線を移した。

問ういかけられる眼まなこだったが、パトリシアも困った顔で  
娘むすめを促うながした。

「黙もくっているのは失礼ですよ。何を食べたの？」

ルウが尋ねた。

「お嬢さんが朝ご飯に何を食べたのか、お母さんが  
知らないんですか？」

これはパトリシアには予想外の質問だったらしく、  
上品に眼を見張まった。

「ええ。娘とは食事の時間が違いますから」

「休日もですか？」

「ええ」

無邪気な口調だった。この人はなぜそんなことを  
訊くのだろうと不思議に思っている声でもあった。  
ルウはそんなパトリシアを正面から見つめると、  
フロレンスに視線を移して微笑した。

「今日はお天気もいいから、外でご飯にしようか。  
皆さん、こちらへどうぞ」

案内したのは庭園とは反対側のテラス席だった。

ロジャーが周囲を見渡し、感心したように言う。  
 「ほう、これはいい。開放感がある。向こうからも  
 こちらは見えないんですね」

「ええ。隠れ家ホテルですから。正式に開業したら  
 ぜひいらしてください」

ちゃっかり宣伝もしている。

テラスには白い卓と椅子がいくつか並んでおり、  
 ルウは親子三人とソフィアで一つの卓に座らせた。

大きな卓なので、充分、余裕がある。

他の卓から椅子をもう一つ持ってきて五人掛けに  
 するのかもしれない、パラデューだけは一人で別の  
 卓に座らせた。

「一家団欒に知らない人が混ざっていたら、フロア  
 レンスが食べにくいでしょう。パラデューさんには  
 ほかたちがお相伴しますよ」

そのフロアレンスは両親と祖母と一緒にとはいえ、  
 知らない場所で、知らない大人が周りにいるせい、か、  
 静かに椅子に座っていた。

すると突然、自分といくつも違わないような声が  
 すぐ近くから話しかけてきた。

「好き嫌いが多いんだって？」

声のほうを見たフロアレンスは息を呑んだ。

本当に心臓が止まったかと思った。寶石のような  
 濃い緑の瞳が自分を見つめていたからだ。

それが生身の人だとは最初はわからなかった。

その人の顔の周りを金色の光が取り巻いて輝いて  
 いたからだ。真昼に天使が現れたのかしらと呆気に  
 とられて慌てて見直すと、その人の髪が太陽の光を  
 反射して光っているのだった。

「おれも子どもの頃は草は食べなかったな。今では  
 割と何でも食べるけど」

「せめて野菜と言ってくれませんか」

大人のような話し言葉なのに、やはり声は若くて、  
 そちらを見たフロアレンスはまた息を呑んだ。

今度は銀の天使だった。自分を見つめているのは  
 紫水晶のような瞳で、透き通るようにきれいな顔が

優しく微笑している。

「こんにちは。フロレンス。わたしはシエラです。ここのお食事なら美味しく食べられますよ」

「おれはヴィッキー。ちなみに、どっちも男だから。よろしく」

生身の天使二人に話しかけられたフロレンスは、びつくり仰天して、ぽかんと口を開けている。

セラーズ夫妻もソフィアも、少年たちの桁外れの美貌に驚いていた。特にソフィアは金と銀の二人をしげしげと見比べて、感心したように言ったものだ。

「まあ、あなたたちはぜひ絵のモデルをするべきね。本物の天使像が描けるわ」

「恐れ入ります」

「おれはモデルに向いてないと思うよ。じつとしているのは苦手なんだ」

話しながら、金と銀の天使たちは、大きなボウルいっぱいいのサラダとピクルスの瓶を卓の中央に置き、各人の前に取り皿とフォーク、グラスを並べた。

シエラがデカンターの中身をグラスに注ぐ。

「大人の皆さまは本来でしたら、お酒を召しあがるところでしようが、今日はまかないなので。野菜とピクルスはお自分でお取りください」

注がれたのは鮮やかなオレンジ色の液体である。ロジャーが苦笑しながら、やんわりと抗議した。

「困ったな。朝食にオレンジジュースを飲んできたところなんだよ」

「オレンジではありませんよ」

「本当かい？」

「ええ。どうぞ、召しあがってください」

シエラは笑顔で言い、リイも少女に笑いかけた。

「飲んでごらんよ。美味しいから」

少女はおずおずとグラスに手を伸ばした。

一口飲んで、眼を丸くする。

「……美味しい」

大人たちも同様の感想を洩らした。

「あら、まあ……」

「これは美味い」

見た目の色から想像した味ではないが、美味しいことには違いない。

小さなグラスだったので、皆、あつという間にグラスを空からにしてしまった。

「おかわりはご自分でどうぞ」

シエラが言つて、デカンターを卓に置く。

真つ先に手を伸ばしたのはフロレンスだった。

よほど気に入つたのだろう。

なみなみと注いで、また一気に飲もうとしたので、

シエラは笑つて注意した。

「あんまり飲むと、それだけでおなかがいっぱいになつてしまいますよ」

ロジャーもおかわりを注いで言う。

「いや、しかし、本当に美味いよ」

ソフィアとパトリシアはジュースを味わいながら首を傾かしげている。

「初めていただく味だわ。オレンジでないとするど、

何かしら？ マンゴーでもないし、赤いメロンとも

違うし……」

「何か違う種類のオレンジなのかしら？」

シエラが言つた。

「人参じんじんですよ」

「まさか！」

大人たちは驚いた。

「本当です。檸檬レモンと、ほんの少しだけ蜂蜜はちみつを入れてありますが、生の人参の味ですよ」

フロレンスもびくりした顔でグラスを置いた。

「……違います。これ、人参じゃないです」

銀の天使は優しく微笑した。

「そうですね。普通の人参とは違うと思いますよ」

「うちの料理長には美味しいものをつくれる名人の知り合いがたくさんいるんだ。これは野菜づくりの名人が育てた人参を使つてるんだって」

金の天使も笑顔で説明する。

「おれもさつき飲んでみて驚いた。全然人参らしく

ないもんな」

「最初は人參の種類が違うのかと思つたのですが、普通に市場で売られている品種だそうです。育て方次第でこれほど変わるものなんですな」

店内に引き返した黒い天使が戻ってきた。

「はい。おまちどおさま。今日のメインです」

それぞれの皿に料理を取り分けたが、ソフィアとセラーズ一家はその料理を見て、再度驚いた。

パラデューもだ。

眼の前に置かれた馴染みのない物体にまたしても困惑し、ソフィアも困つたように眩つぶやいた。

「……どうやっていただくのかしら？」

シエラが氣を利かせて話しかける。

「本来はそのまま掴つかんで食べるものですが、奥さま、よろしければナイフをお使いになりますか？」

「ええ。お願いできますか？」

本格的な高級料理店そのもののやりとりの横で、パトリシアが切迫した様子で言い出した。

「……あの、待つてください。これは、困ります。

ハンバーガーでは困るんです」

そう、ルウがトングを使ってそれぞれの皿の上に置いたのはハンバーガーだったのだ。

一口にハンバーガーといつても様々な種類がある。

具をたっぷり挟んで塔のようにそびえ立つものや、おしゃれな店になると、最初からパンズの片方が横倒しになっていて、具を見せているものもある。

そういう『ハンバーガー』はナイフとフォークがなくてはとても食べられないが、彼らの前に置かれたのは軽食スタンドで紙にくるんで売られている、片手で掴める大きさのハンバーガーだ。

しかし、食べたことのないソフィアには馴染みのないパンケーキのように見えたのだろう。

シエラが差し出したナイフを素直すなおに受け取ると、不思議そうにパトリシアに尋ねた。

「どうしてこれではいけないの？」

「だって、お母さま。軽食フライングフードよ。ほとんどが脂質で



栄養が偏<sup>かたよ</sup>っているし、油も古くなったものを使っている場合もあるって、報道で見たわ……」

「それはないよ」

金の天使が言下に否定する。

「テオが料理に古い油を使うなんてあり得ない」

ルウはパトリシアをなだめるように話しかけた。

「まずは食べてもらうことが肝心<sup>かんじん</sup>です。お嬢さんが食べ慣れていないものを出したところで、それこそ食が進まないでしょう」

「でも……」

パトリシアはまだ不安そうだったが、銀の天使も加勢した。

「それに、このハンバーガーにはトマトもレタスも玉葱<sup>たまねぎ</sup>も入っていますよ」

途端<sup>とたん</sup>、フロレンスが困った顔になる。

「玉葱は、食べられません……」

ルウは優しく話しかけた。

「人参も嫌いなんだよね？ それじゃあ、さっきの

ジュースは美味しくなかった？」

少女は黙ってしまふ。

「このハンバーガーなら大丈夫。嫌いな玉葱の味はしないから。食べてごらんよ」

フロレンスはまだ躊躇<sup>ためら</sup>っている様子だったが、ルウは少女が食べ始めるのを待ったりしなかった。

「ぼくたちもご飯にしよう」

明るく言って、さっさとパラデューの隣に座り、リイとシエラも、いそいそと席に着いた。

シエラはどうしても客<sup>ゲスト</sup>でいるより接客係<sup>ホスト</sup>に回る性分なので、中腰で周りの人々に問いかけた。

「お野菜を取り分けますか」

「ありがとう。でも、まずハンバーガーを食べよう。せつかくできたてなんだから」

三人は嬉々<sup>きき</sup>としてハンバーガーを取り上げた。

パラデューも、おそろおそろの彼らに倣<sup>なま</sup>った。

コース料理ではパンを少しづつちぎって食べる。

丸ごとのパンにかぶりついたりはしない。

パラデューにはマナー違反に感じられる行為だが、それがこの食べ物の食べ方であれば致し方ない。

リイがまじまじとハンバーガーを見つめている。

「これも消えるのかな？」

何しろホットドッグという前例がある。

あの時は一口食べたと思ったら、次には空っぽになった自分の手を見つめていたという信じられない体験をしただけに、ルウもシエラも何とも言えない顔になり、パラデューも真剣に頷いた。

「心してただこう」

四人はいささか緊張しながら、ことさらゆっくりハンバーガーに噛みついた。

結論から言うと、消えなかった。

最初の一口をじっくり味わった時点で、四人とも食べかけのハンバーガーを思わず見つめたのだ。

「……すごいねえ」

ルウの言葉にシエラが頷く。

「……はい」

申し合わせたように二口目を嚙む。

パラデューも同様にして、呆然と言った。

「いやはや、初めて食べたが、ハンバーガーというものはこんなにも……」

「それは違うよ」

リイが真顔で注意した。

「ハンバーガーつてものを食べるようになってから、一年くらいしか経ってないけど、おれでもわかるよ。これはあくまで例外。特別だから。こんなのが普通だなんて思ったら、軽食スタンドのハンバーガーは食べられなくなるよ」

「あれはあれで美味しいからね。ほくも好きだし、たまに食べたくなるけど、これは……」

ルウが頷いて、ため息をついた。

「次元が違うよねえ……」

シエラも感心しきりだった。

「片手で掴めるご馳走ちそうというものがあるんですね」

ルウ、シエラ、パラデューがハンバーガーを手に

感慨かんがいにふける間に、リイはたちまちハンバーガーを平たいらげて立ち上がった。

「一個じゃあ全然足りないな。もらってくる」

給仕係を自認するシエラが慌てたように言う。

「いえ、わたしが……」

だが、シエラのハンバーガーはまだ半分ほど形が残っているので、リイは止めた。

「いいから、それ、食べちゃえよ。——そっちは？ おかわりいる？」

最後の問いかけは隣の一家に対してだ。

セラーズ一家も手にしたハンバーガーを見つめて固まっていたが、我に返るや、夢中で食べている。

もちろんフロレンスもだ。

味が気に入ったのは間違いない。

四人とも声をかけられたことにも気づかない様子だったので、リイは答えを待たずに店内に戻った。

すると、そこでも料理人一同が手にしたハンバーガーを真剣な表情で見つめているところだった。

とても食事の風景とは思えない。

皆、一口嚙っては頭を抱え、二口嚙っては吐息を洩はららしているのである。

「……いつも思うことだけど」

「……何がこんなに違うんだ？」

「いい材料を使っているのは間違いない。最高級の赤牛の肩肉を叩いて、バンズの小麦粉も、普通ならハンバーガーにはまず使わない種類を使ってる」

「けど、それじゃあ、高い材料を使ったら俺たちにこの味が出せるのかって話になるぜ……」

若手の一人、トムがエセルに尋ねる。

「このバンズ、エセルもつくったのか？」

パン職人の間では若手のホープとされている彼は、『お先真つ暗』とでも言いたげな顔で否定した。

「見てただけだよ。全部見てたけど、料理長は何も変わったことはしていない……」

そう言いながらも、エセルの口調には『それでは何の解決にもならない』という思いがあふれている。

テオドールがいなくなった後は、自分がこの店のパンを焼かなくてはならないのだ。この味を完璧かんぺきに再現するのは無理でも、『前と比べて味が落ちた』とお客を失望させることだけは避けねばならない。先行きは厳きびしいが、どうしても進まねばならない道だった。

ハンバーガーを片手に修行僧のような表情で黙り込んだエセルに、チャールズが苦笑しながら言う。

「考えても始まりません。確かなことはテオ先生のハンバーガーが抜群に美味しいということです」

「だよな」

ザックが大まじめに頷いた。

「クラム赤牛の肩肉をわざわざ叩くなんて考えてもみなかったが、うちでやってもおもしろいかもな」

「いいんですか？ 保守的なお客さまには不評かもしれないですよ」

「かもしれないねえな。けどよ、肉の扱いに関しちゃうあ、俺もそこそこ自信がある。美味いとわかってる以上、

試してみない手はないぜ」

肉料理なら『ザック・ラドフード』とまで言わしめた男は不敵に笑った。

「守りに入ったって、いいことはないからな」  
チャールズも笑顔になった。

「そうですね。挑戦心は大事です」

リイが厨房に入って行くと、テオドールが一人で作業をしているところだった。

「ハンバーガーのおかわり、あるかな？」

「——そっちが先だ」

テオドールが示したのは、紙を敷いた二つの籠かごに山盛りになったポテトだった。

それも、明らかにたつた今、揚げたばかりだ。

確かにこれは冷める前に食べねばならない。

ハンバーガーの付け合わせとして、これ以上のもはないのだ。

基本的に肉食のリイも、大いに食欲をそそられる香ばしい匂いがしている。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。